その他

順天堂大学保健看護学部　順天堂保健看護研究12
P.47−52（2024）

周術期看護実習の情報収集トレーニングにおける教育用電子カルテの導入の効果

Effectiveness of the introduction of an educational electronic medical record in information gathering training for perioperative nursing practice.

影山孝子[1)]　平岡玲子[1)]　佐野友紀[1)]　近藤ふさえ[2)]
KAGEYAMA Takako　HIRAOKA Reiko　SANO Yuki　KONDO Fusae

要　旨

臨地実習で、学生が周術期にある患者の看護を実践するためには、情報収集を行い、情報を整理分析し、看護問題を抽出し、ケアプランを立案する。そして、看護問題の解決のために、日々ケアプランの実施と評価を繰り返し、患者がよりよい状態に向かうようにするのである。そのためには、まず初めの過程である情報収集を適切に行うことが重要となる。臨地実習で学生は、受け持ち患者の情報収集を電子カルテから行うが、電子カルテには、膨大な情報があり、周術期にある患者に必要な情報は何か、またそれはどこにあるのかということに、多くの時間を費やしている。

今回、学内実習の中で、教育用に構築された電子カルテを導入し、事例患者の看護過程の展開や技術演習をしたことで、臨地実習での電子カルテの情報収集に活かされたのか、また今後の臨地実習前の看護過程の展開への取り組みへの在り方を検討した。

索引用語：教育用電子カルテ、周術期看護実習、情報収集
Key words：Educatinal electronic medical record, Perioperative nursing practice, Information gathering

Ⅰ．はじめに

本学部における領域実習は、３年生後期から開始される。その中で、周術期看護実習は３週間の実習期間があり、臨地実習を通して、周術期にある患者を学生が１～２名受け持ち、看護過程の展開を行う、患者に現在起きている又は、今後起きると予測されるリスクに対して看護問題を立案し、看護問題の解決のために日々看護実践を行う。看護実践を行うためには、まず患者情報を収集し、情報の整理、分析を行い、看護問題を抽出する。抽出された看護問題の優先順位を考え、ケアプランを作成、実施、評価、修正を繰り返しながら、患者が社会復帰するまでの看護実践を臨地実習で学習するのである。この３年生後期から始まる臨地実習のために、２年次より、各領域で看護過程の展開を学習する。多くの場合、ペーパーペイシェントが提示

1）順天堂大学保健看護学部
2）長岡崇徳大学看護学部看護学科
1）***Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing***
2）***Nagaoka Sutoku University Department of Nursing Faculty of Nursing***

（Dec. 15, 2023　原稿受付）（Dec. 15, 2023　原稿受領）

され、その情報から看護問題を抽出するのである。患者の疾患名から病態を調べ、根拠に基づいた看護を提供する学習を行う。しかしながら、ペーパーペイシェントにおける情報は、限定的であり、必要な情報がすでに提示されていることが多く、実際の患者のような経時的な情報から看護に必要な情報をピックアップし、アセスメントすることが難しい。また、臨地実習においては、患者の情報を収集するために電子カルテを使用して行うが、電子カルテには情報量が大変多く、学生は戸惑いを抱いている。

近年、周術期管理の進歩により、入院期間が短縮されたことから、患者の情報をできるだけ早期にアセスメントし、看護問題を解決に導く援助を実践する能力が求められる。しかしながら、学生は、周術期看護を実践するために適切な情報を得るため、慣れない操作でどこを閲覧したら必要な情報が得られるのかと、実習時間の多くを電子カルテの前で費やしている。そこで、今回、臨地実習に向けて必要な情報を速やかに収集できるように、教育用電子カルテを導入した。教育用電子カルテの導入の効果に対してアンケート調査を行い、周術期看護実習の情報収集トレーニングにおける教育用電子カルテの導入の効果と、今後の病棟実習に向けた学内での看護過程の展開の学習と技術演習の在り方を検討した。

Ⅱ．方法

１．調査対象者

本学部に在籍する３年生で、2022 年 10 月～2023 年２月の期間に、領域実習の中で周術期看護実習を行った 81 名を対象とした。

２．調査方法

学内実習では、事例患者の看護過程の展開と術後観察、寝衣交換の技術演習を行った。事例患者は、教育用電子カルテ上に登録されている患者より教員が選定し、学生へ提示して必要な情報収集を行ってもらった。使用する教育用電子カルテは、Medi-LX 社の「Medi-EYE」で、学生は ID とパスワードでログインし、患者名を選択して、患者基本情報、診療録、経過表などから必要な情報を収集した。また、教育用電子カルテの公開を学内実習日の５日間の９時から 16 時までとして、情報収集する時間を限定することで、臨地実習で限られた時間内での情報収集を行うことを意識づけた。

周術期看護実習は３週間の実習期間中に、グループ単位で臨地実習を行うが、一度に実習を行う学生の人数に制限を設けており、１つのグループを半分に分けて臨地実習を行っている。前半に臨地実習を行い、その後学内実習を行う学生（以下：前半学生）と最初に学内実習を行い、後半に臨地実習を行う学生がいる（以下：後半学生）。そして、３週間の周術期実習が終了した後に Google フォームにてアンケート調査を行った。

３．調査内容

教育用電子カルテを使用した学内実習に対して、前半学生と後半学生のそれぞれが、周術期看護に関連する情報収集に関して、今回、導入した教育用電子カルテの中で、看護実践にどの情報が役立ったのか、術後経過の経時的情報を収集できたか、技術演習における援助計画や技術演習に役立ったか、教育用電子カルテの情報収集が病棟実習の情報収集に活かされたかをリッカート尺度４件法にて質問をした。また、実践力の向上につながったか、自由記載として、教育用電子カルテを使用した看護過程の展開の学習に役立ったことや感じたことの回答を求めた。

４．倫理的配慮

本調査は、順天堂大学保健看護学部研究等倫理委員会の承認を受けて実施した（順保倫第４-11 号）。アンケート調査の実施に当たり、強制力が働かないよう

に、周術期実習を担当しない教員から調査に関する説明を行い学生に協力を依頼した。アンケート調査の参加不参加は自由意志であること、不参加による不利益は受けないこと、匿名性を確保すること、本調査は周術期看護実習の成績には影響しないことを説明した。

Ⅲ．結果

1．回答数および回答率

アンケート実施の結果、前半 17 名、後半 19 名、合計 36 名（回答率 45.7%）の回答が得られた。

2．周術期看護にどのような情報が役に立ったか。（図 1）

学生が周術期看護を行うために、教育用電子カルテの事例患者から収集した情報の中で、患者の情報を分析し、看護問題を抽出するために役に立った情報を回答したものを示したものである。現病歴、既往歴、術式の情報、術前検査、術中の情報、術後経過、家族の情報と看護過程の展開を行うために、術前から術後を通して患者の情報を収集していた。

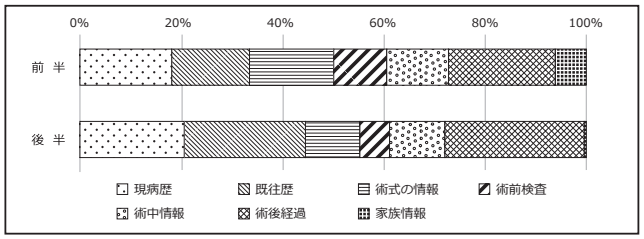

図 1　周術期看護にどのような情報が役立ったか

3．術後の患者の経過を情報収集できたか。（図 2）

術後の経過の経時的な情報収集に関して、すべての学生が、「非常にできた」「できた」「まあまあできた」と回答をしており、教育用電子カルテから事例患者の術後経過を収集することができていた。

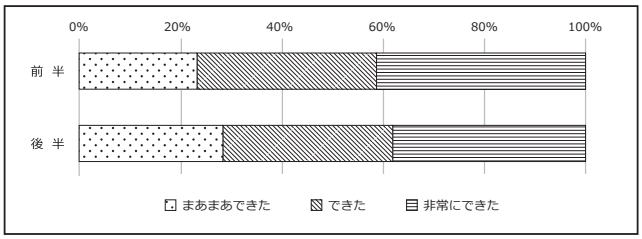

図 2　術後の患者の経過を情報収集できたか

4．情報収集トレーニングにおける教育用電子カルテの導入が、技術演習「術後観察」の観察項目の抽出と看護実践につなげることができたか。（図 3）

前半学生全員が「非常にできた」「できた」「まあまあできた」と回答した。一方、後半学生の 2.3%は教育用電子カルテのよる情報収集トレーニングが技術演習において、観察項目の抽出と実践につながったと思っていないと回答した。

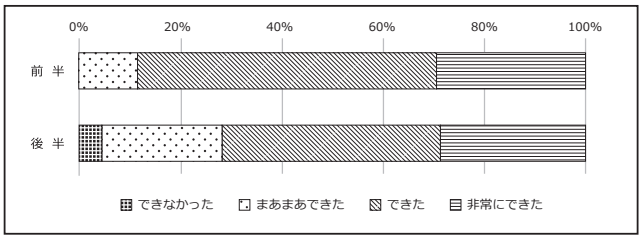

図 3　技術演習：術後観察が看護実践につなげることができたか

5．情報収集トレーニングが、看護過程や技術演習の実践力の向上につながったか。（図 4）

教育用電子カルテを利用した情報収集トレーニングが、実践力の向上につながったかに、前半学生は

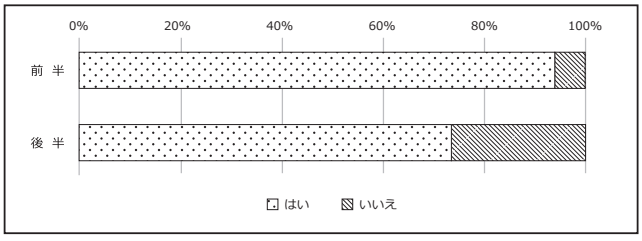

図 4　情報収集トレーニングが実践力に向上につながったか

94.1％が「はい」の回答をしているが､後半学生は「はい」の回答が 73.3％であった。

6．情報収集トレーニングが今後の実習（他領域を含む）に活かされるか。（図５）

前半学生、後半学生ともにすべての学生が、「非常に活かされる」「活かされる」「まあまあ活かされる」と回答した。

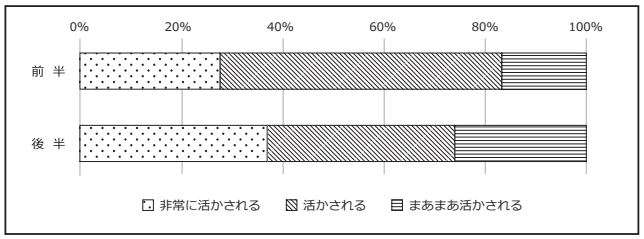

図５　今後の実習に活かされるか

7．自由記載

自由記載では、ペーパーペイシェントと異なり自らが情報を意図的に収集しなければならず、必要な情報を収集する力がついたこと、多職種の情報も載せられていることから情報が看護問題の立案に活かせるとの記載があった。

Ⅳ．考察

今回導入した教育用電子カルテの活用は、臨地実習において電子カルテでどこを閲覧すると周術期看護に必要な情報を収集することができるのかということにおいて、学生は術前から術中、術後だけでなく、既往歴や術前検査からも情報を収集できていると回答している。これらは、周術期にある患者の全体像をとらえるためには必要であり、術前には患者のリスクを評価し、術後には、合併症の予測や社会復帰支援には欠かせない情報である。また、今回の教育用電子カルテを使用した事例患者の看護過程の展開と技術演習は、実践力の向上や今後の実習に活かされると考えており、教育用電子カルテを導入した効果はあったと考える。しかしながら、看護実践するためには、情報収集により得られた情報からアセスメントをして看護問題を抽出し、ケアプランを立案して実施と評価を繰り返していかなければならない。知識とアセスメント力、技術力の向上が求められる。香川は、「学内の学習は、情報を能動的に収集しなくても何とかなると学生は考えているが、臨地実習では、自ら積極的に情報を収集し、問題を積極的に解決していかなければそこでの学生の学習動機である患者の状態改善が果たせない[1)]。」と述べている。また、『「合格点の取得」が学習の動機や目的であり、臨地実習は、「患者の状態改善」が学習の動機や目的である[1)]。』と述べており、患者の情報から現在の状態や今後予測されることをアセスメントし、どうすれば患者の状態改善に導くことができるかという、患者の状態改善を目指した看護を学内でも行うことが、臨地実習への効果的なつながりになると考える。

近年、入院期間が短縮されている。手術目的で入院している患者も同様に入院期間が短縮している。そのため、看護師は速やかに患者の情報を収集し、アセスメントを行い、看護問題を抽出し、看護実践、評価を繰り返し、術後合併症の予防にむけた看護実践と社会復帰に向けた支援を術前から行っている。看護基礎教育を学ぶ学生においても、臨地実習では短い入院期間の中で、患者の疾患や術式、社会的背景に合わせた看護を実践することが求められる。

また、臨地実習において電子カルテは、個人情報であるため、患者に同意が得られてから学生は患者情報を閲覧することができる。電子カルテは、膨大な情報量があり、どこを閲覧すればいいのかという操作方法、どんな情報を収集すればよいのかといういうことに戸惑う学生が多い。千田は、臨地実習において学生の状況を「日々変化する患者の身体的状態を把握し、患者の状態に合わせて多面的にアセスメントして看護過程

を展開し、記録することに対し困難感を抱いている[2]。」と示しており、特に患者の状態が日々変化する周術期看護では、患者の全体像を捉えて患者のリスクを評価し、合併症の予防と予測をするためにどのような情報からアセスメントするかという知識が求められる。また、中本は、「看護過程を展開するには、患者の全体像を捉え分析し、看護問題を明確にした上で、それを解決するための看護計画を立案、実施し、さらに評価するという一連の組織的な問題解決の過程を辿るために、思考と行動を連動させていく必要がある。そのために、情報を早い時期に整理する力や、そして今後の予測を立てていく力などを必要とする[3]。」と述べている。いち早く必要な情報が収集できる能力の向上は、必要な情報を収集する行動とアセスメントをする思考により、入院期間が短縮している患者に対して、患者の状態に合わせて速やかに看護実践ができる第一歩であると考える。

土井は、「学生が電子カルテ操作に慣れておくことが必要であり、実習前に触れておくだけでもイメージしやすいと思っており、電子カルテ教育システムを使用する効果が得られていると考えられる[4]。」と述べており、今回、病院の電子カルテに近づけた情報収集ツールを活用することで、臨地実習で電子カルテによる情報収集への、苦手意識の解消がされ、さらには、周術期にある患者に対してどのような情報を収集するかを理解しておくことで、臨地実習を効果的に進めることができると考える。また、平野が教育用電子カルテの活用を、「基礎看護学実習Ⅱの学生による教育用電子カルテを用いた学内実習において、グループ内の検討を繰り返し、看護上の問題を整理していくことが可能となったと推察しており、さらに事例の顕在的な看護問題を検討し、優先順位を決定することが出来ていた[5]。」と評価している。本学部で、２年次に行う基礎看護実習からさらに知識を深めて臨む領域実習の学生が、看護過程の展開の取り組みを行うことは、学生間の意見交換や教員による指導を重ねることで、臨地実習への効果的な準備になると考える。以上により、教育用カルテの導入をして、実習前の演習で意図的に情報を収集して看護過程の展開を行うことにより、臨地実習で適切な情報収集と情報の整理が行われ、今後を予測した問題解決のための看護実践につながることが期待できる。

臨地実習学生受け入れ状況から、前半学生は「臨地実習から学内実習」と後半学生は「学内実習から臨地実習」という実習の流れになっているが、今回の教育用電子カルテの導入は、前半学生、後半学生どちらの学生もそれぞれ情報収集トレーニングの効果が得られていると考え、今後の実習への有用性が示唆された。つまり、臨地実習前に学内実習を経験した学生は教育用電子カルテの活用による情報収集トレーニングを経て、病棟での実際の電子カルテの利用に戸惑うことが少ない。臨地実習後に学内実習を経験した学生は、情報収集に基づく判断からケア実施評価に至る思考の道筋が再確認でき、また看護援助の振り返りとしての教育用電子カルテを活用した情報収集トレーニングであったと考える。しかしながら、教育用電子カルテを活用した情報収集が、術後観察の看護技術の観察項目の抽出と実践につながらなかったと評価した学生がいたことに対しては、経時的な事例の提示方法を検討し、その時々の患者の状態から実践を考える、臨床判断能力を高めるための学内での学習方法を検討していく必要がある。

今後の課題は、看護実践には適切な情報を収集して、その情報を適切に分析できているかというアセスメント能力や看護実践能力、臨床判断能力が必要なことである。教育用電子カルテ導入の効果は得られたため、今後、アセスメント能力の向上や看護実践能力の向上を目指した効果的な教材の開発の検討を行っていく必要があると考える。

Ⅴ．謝辞

本調査にご協力いただいた学生の皆さんに感謝申し上げます。なお、今回の試みは、「令和４年度学長教育プロジェクト」の助成を受け実施した。

Ⅵ．引用文献

1）香川秀太，桜井利江：学内から臨地実習へのプロセスにおける看護学の学習の変化：状況論における「移動」概念の視点から，日本看護研究学会雑誌，Vol.30, No.5, 39-51, 2007

2）千田寛子，堀越政孝：成人看護学実習における看護学の抱える困難感，群馬保健学紀要，32, 15-22, 2011.

3）中本明世，伊藤朗子：臨地実習における困難感の特徴と実習状況により困難感の比較－基礎看護学実習と成人看護学実習の比較を通して－，千里金襴大学紀要，12, 123-134, 2015.

4）土井英子，山本智恵子：電子カルテ教育システムにおける看護学生の自己評価，新見公立大学紀要，第 34 巻 , 21-35, 2013.

5）平野加代子，北島洋子：基礎看護学実習Ⅱにおける教育用電子カルテを用いた学内実習の取り組み，宝塚大紀要，No.35, 2021.